

令和6年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業
中間支援振り返りシート(2025.3)

「唐津市版 地域循環共生圏の実現」

多様な主体が積極的に連携・協力し
自然資本と調和した
多様な”ビジネス”が創出/共創される街づくり

活動団体の活動地域 : 佐賀県唐津市

活動団体名 : 唐津市

中間支援主体名 : GBPラボラトリーズ

活動計画(概要)

地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

地域内のプラットフォームの活性化と市域内外の企業や研究機関等との連携を強化。
地域ごとの特性を活かした新たな取組が創造されていくエコシステムを構築し、外部環境の変化に対応しながら地域が発展していく持続可能な社会を実現する。

地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

①自然的要素、②歴史・文化的要素、③将来都市構造図のゾーン、④市内における通勤通学状況、⑤都市性格分類を踏まえ、5つの地域に区分。

それぞれの地域ごとの恵まれた資源と文化的、地理的特徴を活かし、発展・持続可能なものとしていくために各々の地域資源、伝承や活動情報を集め可視化、共有する仕組みとそれらを包含したプラットフォームを構築。そこを推進、コーディネートする中核団体を輩出する。

ローカルSDGs事業として取り組む内容

ステップ0

- ・唐津エリア5つの動きを整理する
- ・地域プラットフォームの種を見つける、呼び起こす

ステップ1 地域の主体性を育む

地域プラットフォームづくり、仲間づくり

- └事業主体となる事業者の発掘、連携のための動き
- └共通目的やありたい姿、コンセプト、目標(目印)をつくる

- #意見交換の場をつくる
- #情報入手、気づき(自分ごと)のきっかけをつくる

地域の現状

【資源】自然資源は自然環境保全地域特別地区となる檜原湿原や国定公園、自然公園などの良好な景観・自然資源や、唐津城、名護屋城、唐津くんちといった伝統的な人文資源が継承されている。自治体としてはR5ゼロカーボンシティ宣言やR6新設のカーボンニュートラル推進係の立ち上げなど共生圏の構築に向けて力を入れている。民間の動きでは自然と触れ合う森海のアクティビティや海岸清掃などが活発。

【課題】事前環境に近い現場では地域の人たちの自然への関わりが変化しておりバランスを保ちにくい状態になっている。

役所内では地域の目指すべき姿に対して、担当者、所属部長の熱量や知識に差がある。

本事業を通じて、担当者(市及び地域の)に依存せず地域のプラットフォームをエコシステム化していくため、各々が自分事としてとらえる視点を持てるように巻き込んでいく事、育成の土壌をつくるのが理想だが、チームとして長く動くことが難しい自治体としては長年の課題となっている。

3か年状態目標 【当初】

2026年度末の状態目標

「唐津市を中心に近隣エリアのPoC、PoV、PoBを促進。唐津の街が新たな取組創造における窓口に」
市内外の多様な主体と積極的に連携・協力することによる連携体の創出し、自然資本と調和した多様な”ビジネス”が創出/共創される街づくり

本事業に関連する実証実験やプロジェクトが生まれ、事業を開始。
(ブルーカーボン・生物多様性の保全・海洋プラスチックなど)

2025年度末の状態目標

構築した地域プラットフォームにおいて、本格的な実証実験やプロジェクトの創出に向けた情報収集・マーケティング調査及び必要となる専門家や企業の誘致を行う。
また、事業に必要な資金について、様々な観点から持続可能な形を模索する。

2024年度末の状態目標

市内外の多様な主体による唐津市をフィールドとした課題などのインプット・アウトプットを行い共通認識のもと地域プラットフォームを構築する。
また、現状において不足している情報・人材などを洗い出し、解決策を検討する。

地域プラットフォーム構築に向けて、本市において生物多様性の保全をはじめとしたネイチャーポジティブの実現を目指し、九州各地の関係者を招き(仮称)「九州ネイチャーポジティブ(NP)サミットin唐津」を開催し、市内外へ唐津市の取組みを発信する。

3か年状態目標 2025版

2026年度末の状態目標

- 生物多様性地域戦略の策定
- 第3次唐津市環境基本計画への反映・策定調整(R10～)
- 活性化企業人の受け入れ、起業型地域おこし協力隊の活用
- 外部資金獲得(デジ田、重点、令和の里海、、、基金)
- 地元高校生との事業の実施(→からの越境交流)
- 種苗の育成(海業の核ビジネス、収益)拠点形成
- MICEなどイベントのエキスカーション地へ
- グリーンツーリズム、グリーン研修の受け入れ体制構築
- 循環共生圏、流域MAPのビジュアル化

2025年度末の状態目標

- (仮)NP推進協議会の設立、NPカレッジの立ち上げ
- 企業版ふるさと納税の器づくりと受け入れ
- 生物多様性連携増進活動実施計画の策定・認定
- NPカレッジ構想開始(R7～)
- 外部資金獲得(デジ田2、重点、令和の里海、、、基金)
- 流域全体、海底地形のモニタリング計画と実施
- 住民モニタリングの体制構築
- 地元高校生との事業の実施(→からの越境交流)

2024年度末の状態目標

- ESD環境教育プログラムの開発、モデル事業の実施。
- 研究機関(大学、企業)との連携

中間支援の方針

■見立て

【活動団体の得意不得意】

唐津市という看板を利用した巻き込みや、協力依頼は得意。不得意は事業の推進。これは自治体の基本的な姿。

【ポイント】

地域プレイヤーの発掘と育成、地域プレイヤー同士のつながりを生み出し自立自走を後押し(制度、政策。市役所内横断連携)する体制を構築。→構築に向けた機運醸成がこの事業の鍵。

単独での取り組みによる動きは一定数作れるし出てくる、、、がエコシステムや共生圏構築に向けては共通の意義や目標、マインドセットが必要と考えている。

■打ち手

【支援予定】

- ・会議やワークショップのファシリテーション
- ・コーディネーターを育成するための機会提供
- ・グリーンリスキリングの機会とプログラム提供
- ・具体的な事業やプロジェクト立ち上げのためのリソース誘引
- ・情報提供及び収集支援。先行地域や企業、団体とのネットワーク提供
- ・グリーンツーリズムや SDGs 企業研修、PoC受け入れ地域としての実践体験提供。
- ・情報格差、目標や目的・期待値のミスマッチをなくすための翻訳、つなぎ役の育成伴走。

■中間支援機能の強化・振り返り

自然、社会、経済、(個人)のバランスをとる存在として以下機能を強化。

- ・GXDXを実装した新しい地域創生モデル、グリーンビジネスの創出。
- ・パブリック、民間行政と既存行政の共創。ジャストランジション支援。
- >> 事業を通じて、地域プラットフォームが目指す「ありたい姿」への多面的支援手法のレベルを上げたい。中期目線では活動団体の事例や活動を近隣エリアや広域で共有・共同調査。将来的には海外との情報交換や輸出展開できるような支援機能を持つ。

活動・支援のプロセスの振り返り

■R6年度活動・支援内容

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
活動団体の活動			唐津市ブルーカーボン事業可能性検討調査業(ブルーカーボンクレジットポテンシャル調査)の実施									
								ローカルブルーオーシャンビジョン推進事業				
									劣化した生態系の保全に資するモデル事業伴奏支援			
		庁内推進会議			庁内推進会議							
					対馬訪問 伊那訪問					杵岐訪問	対馬訪問	南三陸訪問
	連携協定			連携協定				連携協定				
活動団体の活動					◆環境省ネット ワーキングイベント			ローカルブルー イベント①		ローカルブルー イベント②		
						共生サイト申請		唐津ブルーカー ボンセミナー		◆職員向けNP ワークショップ		
							ステークホルダー ミーティング (分科会)	地域脱炭素マッ チングイベント		さが・唐津玄海海洋国 際シンポジウム		
			地域プラットフォーム キックオフMTG					NPイベント		◆親子向け資源 循環出前講座		NPフォーラム九 州in唐津
								◆中間報告会				
中間支援主体 の支援			◆中間支援 ギャザリング①								◆中間支援 ギャザリング②	
中間支援主体 の支援	定期MTG(進捗確認、事例や情報探求)											
	外部人材紹介、事業(事例)情報・外部環境情報の提供。											
	事業企画・事業伴走											

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

内外情報提供及び収集支援。
先行地域や企業、団体とのネットワーク提供



仲間を探す



事業を生み出す



地域のビジョンを描く

中間支援主体の支援

- **上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て**

交流が少なく、他と同じような施策に偏ってしまうこと、情報を鵜呑みにしてしまうこと、小さく(時には閉鎖的に)動いてしまう可能性を減らそう。

- **具体的な支援内容(打ち手)**

色々な人や活動、価値観、大義に触れてもらう。
聞くだけでなく、自ら話す機会を増やす。

- **打ち手による活動団体の変化(意識・行動・活動の進捗)**

行動の量が増えた、活発になった。
小さくまとまらず、大局をみながら目の前の活動に取り組むように。

- **中間支援主体としての気づき・成長**

活動団体への負荷が大きい。
活動団体の動きと違う方面からの干渉も必要。

活動団体の取組

- **活動名・時期**

関係しそうな団体への入会、登録、接触(自然保護協会、ESA、30by30、ESD拠点、ANEMONE、、、)
→初期

地域、人物への訪問(対馬、壱岐、南三陸、福岡、伊那、東京、、、)→通年

- **なぜそれを実施したのか(実施目的)**

手法の前に問題を明らかにする事。なぜやるか、目指す姿の解像度を上げる必要があったから。もぐら叩きの課題解決にならないようにしたかったから。

- **実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか(活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗)**

仲間(と呼べる協力者)が増えた。関係人口が増えた。活動に対する考えが深まった。

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

情報共有イベント企画開催
ステークホルダー交流

 仲間を探す
 事業を生み出す

 地域のビジョンを描く
 事業主体を探す

中間支援主体の支援

- **上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て**

慣れるまでは疲弊する。この辺でいいだろうという考えになる(精神肉体的疲弊)。現在地を見失う(あれ？今何やってんだろう、、、とか)。

- **具体的な支援内容(打ち手)**

共生圏パートナー募集、イベント企画。

- **打ち手による活動団体の変化(意識・行動・活動の進捗)**

行動の量が増えた、活発になった。
小さくまとまらず、大局をみながら目の前の活動に取り組むように。

- **中間支援主体としての気づき・成長**

単独単発(思考の)事業では変化が小さいがそれも大事、変化と出会いの中で何をどう組み合わせているかの情報入手の大事さ。
中間団体とか活動団体とか気にしないで動く。

活動団体の取組

- **活動名・時期**

キックオフ(7月)
ステークホルダー MTG(10月)
内外交流イベント(12月)
関連イベント(11月、1月)
フォーラム(3月)

- **なぜそれを実施したのか(実施目的)**

多様な主体の掘り起こし、次のステップへの機運醸成。

- **実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか(活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗)**

点が面になってきた。
内外の意識、温度感が見えてきた。
活動団体の活動(負担)がかなり増えた。

活動・支援のプロセスの振り返り

- (特に前2スライドの支援を実施するにあたり、)今年度、力を入れて取り組んだ中間支援は？(中間支援機能チェックリスト.xlsxより上位3つを選んで記入)

協働ガバナンスの項目	中間支援機能	項目(番号)	支援をしたタイミング等
参加の誘発	プロセス支援	1)	初期
チェンジ・エージェント機能	変革促進機能	1)	初期
チェンジ・エージェント機能	資源連結機能	1)	通年、状況に合わせて

- 共生圏づくりを進めるために、活動団体の能力をどう引き出したか

情報やネットワークの提供と事業企画により、活動団体の熱意、能力、好奇心を事業に繋げることができた。

- 中間支援主体として向上したと思う中間支援機能

言語化、提供フィールドや人脈の幅、活動範囲が広がった。

- R6課題だと感じたこと

～「土着型中間支援」の価値をいかに社会に浸透させ、ビジネスとして成立させるか～

土着型中間支援の必要性、重要性の認知が難しい(「つなぐ」「調整する」「支援する」などの間接的な貢献が多く、自治体や企業にとって「成果が見えにくい」、「何か成果が生まれたときはプレイヤー(事業者や企業)の手柄になり、失敗したら支援団体の責任になりがち」な構造)。中間支援を必要としない&価値が低い状況がまだまだ多いため、この領域の事業者の量・質が増えない。※例えば「企業↔地域の事業者」「企業↔自治体」「構想や調査、イベントは外部コンサルやイベンターへ」といった動き。この動きが悪いわけではなく事業は進むが、単発単独局地的な動きになってしまうことが多い。(事業が生まれてもヒーロー型)

連環プロデュース、クリエイティブコーディネートといった中間機能が入る事で、社会的にも環境的にも持続可能なシステム構築、第2行政的な動きの活性が期待できる。結果として事業者も経済的に安定すると考える。

地域循環共生圏づくりに向けた次のアクション

- **地域循環共生圏づくりのために、どのような中間支援機能を発揮できるか**と**いいと考えているか**。R7～中間支援主体として今後どのようになりたいか。

目指す姿：現在行っている支援を組織的に行い、より多く広く深く支援が行なえるようになる。

→体制強化。→→価値の「可視化」と「成果の定量化」→→→独自の収益モデルを確立

獲得機能：起業・就職支援、バックオフィス、ファイナンス、デザイン・ブランディング、教育・人材育成・派遣・交流支援、地域での実証支援＞＞企画や構想の実現に向けた体制構築。

支援の視点：モノやサービスの創出のように、形があり短期で効果判断ができる分野ではないため中長期的視点での課題解決支援能力を養う。現代&次世代人材を育成する。

- **活動団体がアクションサイクルを回せるようにするための次年度の見立て・打ち手（具体的な支援策）**

【事業主体、事業体制、仲間の創出】

構想→行動への流れをつくる中心（牽引）役となる団体や個人の創出。

①候補が見えている場合 →グリップ、妬み嫉み足のひっぱり出る杭などの予防。

②候補が見えていない →A外部人材の引き込み（活性化起業人、協力隊、、、）。B地域人材の育成（時間かかる）。C事例で引っ張る（Bの繋ぎ、Aの誘引）。

により、担当に依存しない、負荷をかけない状況を作る。

- **地方・全国事務局にサポートしてもらえると嬉しいこと**

共生圏事業参画企業や団体、非参画企業や団体との交流、情報交換の機会提供、コーディネート。

企業や基金、VC、銀行など資本のあるところとの接点創出、ビジネス機運醸成。（まずは事業や構想相談ベース）